ヘリオテロリズム Vol.1

読書系ウェブサイト管理人9名による創作小説同人誌。
フルDTP制作・CTP出力による美麗な誌面。
ミステリ・SF・ホラー・恋愛・批評……
ジャンルを横断する同時多発異色小説集！

B6判／表紙4C（クリアPP加工）／本文1C／168ページ／¥800

目次

ドラウナーズ【79枚】 いづる
それさえもやがては、見慣れた現実の一つと化してしまう。
本作品は、公団住宅で二人暮らしを続ける粉川しのぶという女性の一人称で記される。両親に反発して家を出ながら、しかし彼女は完全に親と縁を切ることが出来ず、周囲となじめないものを感じながら日々を過ごしている。そうした暮らしに耐えられず、時に自分を傷つけてしまう彼女は、ネットで出会った男性とリアルで会うことで状況を打開しようとする。 6

ヒット・パレード98−89【19枚】 西東ノブ
これはJポップ文学ではない。
1998年5月のある土曜の午後、仕事で車を走らせている私はラジオから流れる90年代のヒット曲を聴きながら思い出す――僕が過ごした日々、そして89年1月の「退屈な休日」のことを。 38

メタ探偵の憂鬱【50枚】 秋山真琴
先生と私の嵐の山荘に隠されたメタとネタと館――ミステリはここから変わる。
白い探偵の名前は夕賀恋史。嵐のなかで覚醒したとき、彼のメタ推理は失われていた。メタ探偵からただの探偵となった彼は、弟子の八雲七瀬と依頼人の夏冬衛音を連れて偶然、近くにあった館を訪れる。夕賀たちが館を訪れてから数刻、事件が探偵を招くのか、探偵が事件を招くのか、早速、殺人事件が起こる。ミステリとしての完成度よりも、結末で待つ驚きと極近の極論さを追及した現代ファンタジイが今、嵐の山荘を訪れる……! 46

スライド【35枚】 根子
ずれていく男と、忘れていく女の物語。
――私はずれていってるんです。
週一回しか営業しない飲み屋で、わたしが出会ったのは奇妙なことを話す男だった。 66

時刻表【46枚】 松本楽志
それは、ほんの短い停電のような――。
見上げた空白の時刻表に刻まれるのは、過ぎ去った時間。人々はみな一様に、虚空を見上げて立ちすくむ。駅に戻れば電車の姿はなく、ただ少女が無慈悲に呟くばかり。「電車は、もう、出てしまいました」空白の時刻表に刻まれた未来を見つけるために、少年は再び歩き出す――。 80

百億の秋に、千億の愛を＃2「赫い生殖」【37枚】 丼原ザ★ボン
「絶海の孤島」と聞いては黙っていられない貴方は、読まない方がいいかも知れません。
「教授」の『教え』に従い、『妄想』を放出し、自らの心身を蝕む『悪意』を取り去ってしまわなければ。さあ、早く――原因不明の胸の「苦しみ」に耐えかねた私は砂波島に渡り、『サークル』に身を投じる。私は『エディター』と呼ばれ、『助監督』、『管理人』の二人の『同志』とともに『クローズド・サークル・プログラム』を実践する。『妄想』の『報告』、『実験映画』の撮影。そして――。 98

輪唱ラヴソング【42枚】 曽良 圭
「俺」と「私」の偽恋愛小説。
思いきって告白したけどあっさりふられた。それはいい。予想してたから。問題なのはその理由。「今は恋愛とかそういう気分じゃないんだよね」と槇田は言った。なんだそれ。十五の女子の言う台詞じゃないだろ。もしかして、気を使ってるの？　他に好きな人がいる、なんて正直に言ったら傷つくと思ったのか？　でも、そんなこと知ってる。今さら言われたところで傷ついたりしない。――「俺」と「私」の〈フェイク・ラヴ・ストーリー〉。 112

キセキ【43枚】 近田蔦迩
その存在こそがキセキである。
わたしの友人にはドラえもんがいる。
世の常識を遥かに超越した彼女の発明品を、試験するのがわたしの役目だ。
記憶は常に封鎖されるため、どういう発明があったかまでは憶えていないのだが――。 128

落し物を届けに行こう【51枚】 鈴木知友
公園で拾った銀色のマシン。それは名探偵の落し物だった――。
うららかな春の午後、桜の花咲き乱れる公園でくつろいでたぼくたち――カズキ、ショーツー、そしてぼく、ソウタの三人が見つけたのは奇妙な銀色のマシン。それは名探偵・空蝉速人のものだった。
そうだ！　落し物を届けに行こう！　少年たちの冒険がはじまる。 146

はじめに 5
編集後記 166
執筆者紹介 167

詳細は➡ http://d.hatena.ne.jp/helioterrorism/10041114

【小説】ドラウナーズ

いづる

「いまのおまえは」タイラーが言う。「どん底がどんなところなのかを想像できない段階にいる」
——チャック・パラニューク『ファイト・クラブ』
（池田真紀子訳・ハヤカワ文庫NV）

机の上に置かれた剃刀を指で一つ摘みあげる。そして、それを左手の手首に当てる。

その様子を自分で眺めながらふと思うのは、左手がまるでこれから右手のやろうとしていることを知らないかのようだ、ということだ。右手はいつも、攻撃する側の手だ。そして左手はいつも犠牲者。わたしの左手に少し前までついていた、口を開けたまま蓋をしかねている傷口は自分だけが盛り上がりひきつったようになっている。常習者はこれをバーコードと呼ぶ。

わたしは息を整える。そしてその剃刀を手首に押し当てて、目を閉じ、そして一気に引いてしまう。即座に痛みがわたしの中を走り抜けていく。

血はすぐには出ない。左手はそもそも切られたことを自傷行為のようにそのまま受け入れている。それはわたしの手首から肘を伝って、一粒、また一粒。濡れた浴室の床点となって落ちていく。一粒、また一粒。濡れた浴室のタイルの上には落ち、水の中に溶けていく。血の滴が手首を辿る感触は自分の中から何かが逃げ出していくようで、わたしは痛みを浴室の中で一人で静かに味わう。それは自分だけが特別に行うことを許された儀式のようだ。

わたしは自分だけに与えられた許しの中で、静かに幸福感に包まれる。でも、電話が鳴り始める。

誰だろう。せっかく人が幸せな気分でいるのに……わたしはため息を吐いて、洗面台のそばに置いていたタオルで自分の傷口を覆う。血が止まらないのは、自分の勇気の証。それとも愚かさ。

【小説】ヒット・パレード98–89

西東ノブ

[16歳未満のグラビアモデルのビキニから覗わにならウェストのラインのような微妙さ」という比喩を思いつくと共に文字通りにそれを頭の中でイメージしてみると私の男根は大きく膨らむ。

高速道路に有り余る周囲の車両の変わりばえの無さに退屈さを感じ、また聴こえる音についても同じことで、私はカーラジオをつけ「嫌いでない曲」を流している放送局を探し、あたかも快晴の青空の下、ドライブを楽しんでる「かのように」、観客の居ない一人芝居で演じてみたりもするのだけれども、それは空しくも抵抗である——そもそも、それから何故、スーツ姿なのだ。

ハンドルを握る私の両手にはいつの間にかクセルを踏み込み始めるが、制限速度オーヴァーで前金など取られては堪ったものらしい、という「小市民的、あまりに小市民的な制心」が頭をもたげ、ほどなく手足の方向も速度へと向かいはするものの、既に前方車両との車間距離は少し縮まっていて、その前トラックの荷台にかけられたこげ茶色の幌の背面の盗を留めているベルトのうり地中に根を張り巡らせていた木だったのだろう、脆くなった地盤では支えきれなくなった木々が、次々と殉ずるように倒伏していくく。

やがて鈍い地響きと共に、山の一角が崩れ落ちた。

それに伴って、ちょっとした地震が山全体を襲う。

動物たちは息を潜め、巣の上に留まっていた雨粒は、震動に従い地面に垂れた。

数秒間だけ、雨足が強くなったように感じられた。

そこに至って、夕賀恋史はようやく意識を取り戻した。

彼はスリップして座から墜落した車の運転席から窓ガラスを突き破って、その山の中でも特に大きな木の根元に投げ出されていた。車が墜落してから地響きによって葉の上に留まっていた雨の雫が夕賀の頬を打つまで、三分もかかっただろう。

目覚めたた夕賀は、すぐに起きようとして怪我を負っていなかどうか自分の身体のあちこちから触って確かめた。幸いにして、大きな怪我をしていないようだった。下ろしたての白いスーツは汚れ、全身に切り傷と打撲を負って

【小説】メタ探偵の憂鬱

秋山真琴

神の視点——1

白い水飛沫。

数え切れないほどの雨粒が地面にぶつかり、砕け散り、跳ね返っていた。

虚空を貫き続ける雨が、

それは横転した自家用車の側部から放たれており、その光の中を白い水飛沫が狂ったように踊っている。

刹那。

鋭い閃光。

苦白いそれは、闇の中を一瞬だけ照らし尽くし、すぐに消えた。その一瞬の間、山道に残され、今もなお蒸気を上げているブレーキの跡や、崖から転び落ち、その上を歪ませた車体が生々しく演出された。

一拍の間を置いて、空気を切り裂く轟音が響き渡る。

落雷だ。

雷の残響と雨音に隠され、どこか遠くの方で、あるいは思いのほか近くで、木が倒れる音が続いた。長き に渡

【小説】スライド

根子

私はずすれていってるんです、と藤郎は言った。

ミナミミらほど近くビジネス街の一角。長く続く不況のあおりを受け、空いているテナントが多いビル群は夜に入ると、いっそう静けさを増す。その看板は、街に慣れたものでも余程注意して見ていないと見逃してしまうくらいの目立たなさで、入り口の奥、階段の脇に飾られている。

その店、「クロノスパラダタ」は、わたしの高校時代の友人Kが彼女の友人と共同経営していたお洒落だ。毎週土曜日だけオープンして、週代わりでKと彼人がマスターをつとめるという。

——遊びみたいなんやけどね、知り合いしか来うへんし。

久しぶりにあった同窓会の席で、派遣社員をする傍ら気の合うもの同士で店を持っているのだ、とつもの淡々とした口調で、でも嬉しそうな目をして語るKを見て、なんとなく興味を持ったわたしは、次にKが店番を

【小説】時刻表

松本楽志

廃墟だった。

ホームに置かれたゴミ箱や灰皿、ベンチといったあらゆるものたちは沈黙して、その機能を完全に放棄してしまっているようだ——といっても、崩れてしまったわけではない。物理的にはどこも壊れていない。電気はすべて消えているが、電源を入れればそれらはちゃんと稼働するだろう。自動改札だって、発車ベルだって、駅内アナウンスだっておそらく動くだろう。しかし、それを動かすものは誰もいない。この駅がふたたび生き返り戻ることがあるとしたら、いくら見た目には破壊されていなくても、この駅は廃墟なのだった。

白み始めた空に照らされた時刻表を見上げた。

数字がしめしているはずの、その表には、何一つ書かれていない。

枠だけが、消えそびれた白緋雲となって張り付いている。

死に絶えた廃墟の中で、白紙の時刻表だけが、熱を持っているかのようだった。

【小説】百億の秋に、千億の愛を #2「赫い生殖」

井原ザ★ポン

敬愛なる二人の塔へ——

0.

喉元から胸にかけてが、急に締め付けられたように苦しくなることがある。何か特別、持病や古傷がある訳では無い。普通にテレビを観ていたり、ミステリーの解決篇を読んだりしてしまう最中に何故か突然、である。深い意味は無い——と想いたい。暫くそのまま待つか、最悪我慢して一晩寝てしまえば、次の朝には治っているのだ。一寸した発作と云うか、眩が気紛れを起こしてしまっただけだろうと、目覚めの不快感が祟ったせいで特に深い意味等無いだろうと、何時ものように高を括っていた。それが、一箇月前だ。

それ以来、その苦しさは治まっていない。いや、寧ろ酷くなっているような気さえしていた。寝ても醒めても食事をしても排泄しても、テレビを観ても電話で誰かと話しても、日記を書いてもマスターベーションをしてみた処で、その苦しみ——云い知れぬ違和感は全く拭われることが無かった。明らかに、是迄の症状とは異質なものだった、異常——と云ってもいい。私が砂浜島のことを知ったのは、そんな時だった。

1.

私が砂浜島に渡って来て、今日で丁度一週間が経とうとしていた。正確に云えば、今日の午後五時四十六分で、である。しかし、そんな細かい時刻等、最早私には全く関係の無い代物だ。何故なら、この島には時を刻むものが何一つ存在しないのだから。時間は唯、流れていくだけのものだ。何かの予定を決めたり、誰かの行動を区切ったり、過去を振り返る際の指針になったりするようなものではない。少なくとも、この島に於いて。

この砂浜島——と云うのは我々が用いている通称で、本来は北緯鳥と云うらしい——は、Y県の日本海側の沖合い、約十キロメートルに位置し、我々の他には誰も住

【小説】輪唱ラヴソング

曽良 圭

1

そんなわけで思いきって告白したけどあっさりふられた。それはいい。予想してたから。問題なのはその理由。「今は恋愛とかそういう気分じゃないんだよね」と櫛田は言った。

なんなそれ。十五の女子の言う言同じゃないだろ。もしかして、気を遣ってるのか？

他に好きな人がいる、なんて正直に言ったら傷つくと思ったのか？　でも、そんなこと言われたところで傷ついたりしない。それでも、かすかな期待を抱いて告白する決心をしたのは、櫛田がいつまでたってもはっきりしないだった。

「烏龍茶もっかいください」俺に投げやりな気分で櫛田が手にしている缶に手を伸ばした。「いいよ」「間接キス」「げ」「なめてやる」「それ、もいらないから」櫛田はあっさり言う。俺は虚しくなってため息をついた。「女にふられたくらいで、あんまり落ち込むなって」「おまえが言

授業が終わるタイミングで教室の前で櫛田がでてくるのを待ち構え、偶然通りかかったような素振りで声をかける。

「今日は部室に顔出すか」「じゃあ、一緒に行こう」

部室があるのは、築十七年以上経過している（つまり、俺たちが生まれるより前に建てられた）にもかかわらず、いまだに新校舎と呼ばれている別棟。渡り廊下の手前にある自動販売機の前で、「何か飲む？　おごるよ」とポケットから財布を取り出した。櫛田は不審そう

【小説】キセキ

わたしの友人には、ドラえもんという絵名の友人がいる。ただそれだけの話だ。彼女——ドラえもんという絵名で呼ばれているが、女性——の職業は発明家なのだが、その能力は現代の科学・化学・機械工学といったありとあらゆる学問の水準を遥かに超越しており、それこそドラえもんの四次元ポケットから出てきた、22世紀製としか思えない不思議な道具を次から次へと創り出す。だからドラえもん——ということらしいのだが、しかし、それならそれで、ドラえもんよりももっと似合いの絵名がありそうなものだ。

同じ藤子不二雄印のキャラクターでも、発明家というよりこのあるのであればまずキチンとツ君がいるわけだし、22世紀というよりこだわったとしても、性別と女性なのだからのちがいがあるべきではないか。そもそも彼女のスラリとした見聞は、「不恰好な雪だるまを彷彿させるあの猫型ロボットとは少しも似つかない。クールでスピンスティックな外見とは裏腹に、清流

わたしの友人には、ドラえもんもいる。

もちろん本物ではない。ドラえもんという絵名の友人がいる。ただそれだけの話だ。彼女——ドラえもんという絵名で呼ばれているが、女性——の職業は発明家なのだが、その能力は現代の科学・化学・機械工学といったありとあらゆる学問の水準を遥かに超越しており、それこそドラえもんの四次元ポケットから出てきた、22世紀製としか思えない不思議な道具を次から次へと創り出す。だからドラえもん——ということらしいのだが、しかし、それならそれで、ドラえもんよりもっと似合いの絵名がありそうなものだ。

同じ藤子不二雄印のキャラクターでも、発明家というよりこのあるのであればまずキチンとツ君がいるわけだし、22世紀というよりこだわったとしても、性別と女性なのだからのちがいがあるべきではないか。そもそも彼女のスラリとした見聞は、「不恰好な雪だるまを彷彿させるあの猫型ロボットとは少しも似つかない。クールでスピンスティックな外見とは裏腹に、清流

より一層透明で澄んだ声——つまり、声優の大山某を想起させるこもない。ドラ焼きが好物ということもなければ、髪を青く染めているわけでもない。ネズミに耳を齧られてもいない。お腹に大きなポケットが着いたオーバーオールを愛用しているわけでもない。つまり彼女とドラえもんの間には、ただただ、不思議な道具が介在するだけなのだ。わたしは、彼女にドラえもんという絵名をつけた人間のセンスを、心の底より憎んでいる。あの知性と神秘の結晶体たる女性が、何故コメディ漫画の主人公に喩えられなければならないのか。これは侮辱であり、差別であり、一方的な虐殺である。許されるものならば、わたしは彼女をドラえもんと呼ぶすべての人を敵に廻して、聖戦に身を投じたい。そう、許されるものならば。

だがしかし、この不釣合いな絵名に違和感を覚えているのは、わたしだけではない。彼女を知る人は皆、彼女のことを何の躊躇もなしに、ドラえもんと呼ぶのだ。彼女自身、そう呼ばれることに対して違和感も抵抗感もないようで、わたしはそのことが、彼女の創る発

【小説】落し物を届けに行こう

鈴木知友

あの日、公園にぽつんと落ちてた銀色のマシン。転がったどぶ缶を拾おうとしたぼくが見つけた。

それは、何年前に流行ったオーバーオールを愛用していた、幼稚園からの付き合いである、ふたり、カズキ、ショーリといっしょに帰ることにした。

どうせ、家も近所だしね。

「なあ、部活、どこ入る？」前を行くカズキが訊いた。

学校指定のショルダーバッグをおろしてかけて、バッグが落ちないように上を向いて、あごを前に突き出して歩いている。ここからは見えないけれど、たぶんアイーンの表情だ。

「何それ、前見えてんの？」

「目だけ下見なきゃいけなくて、ちょっと苦しい。それよか、部活だよ、部活、どこか決めた？」

「うーん、まだ」ぼくは答えた。「これというのがなくて」

「水泳は？　アピア行ってたじゃん」

ほんの半年前までぼくはスイミングスクールに通っていた。アピア・スポーツクラブというのがその名前で、駅ビルの裏にある。選手育成を目的とした本格的なのではなくて、ひととおり泳げるようになったら、むしろお気楽な雰囲気のほうがよかった。週に二回、水曜の夜と土曜の夕方に温水プールに戯れて、バタフライがなんとかさまになったころにやめてしまった。

「温水プールだったらちょっと考えてもいいけど、冬のあいだずっと筋トレとかだったらやだしなあ」

➡コミックマーケット 67 にサークル名「ヘリオテロリズム」で参加します。12 月 30 日（木）西地区 “よ” ブロック 19a